

諏訪神社



館山市船形八三三
例祭日
七月第四土・日曜日
鳥居 明神鳥居
社紋 諏訪棍
宮司 石井つね
氏子数
約千軒(船形地区)
境内坪数 約五百坪
御神宝
享保一八年文化二二
年天保三年の棟札
狛犬一對(安政二年
安房の名工武田石翁
の傑作)
御神鏡、神号額(彫刻
は後藤喜三郎橋義信
の作)

祭神

建御名方命(たけみなかたのみこと)
「おすわ様」で親しまれています。

由緒

養老元年(七二七)、各地をめぐり歩いて教えを広めていた行基菩薩が、自然の地形に依る眺望絶佳なる船形山に勧請したと言われています。以来武運、開拓、海上守護神として氏子に崇拜されてきました。

治承四年(一一八〇)八月、海路安房に辿り着いた源頼朝公は、巡拝の折この諏訪神社へも立ち寄り、源氏再興の大願成就を祈願したとも言われています。それ以後は海上安全を守る神社として一層の信仰を集め、地域の漁師、航海者などによって船形地区の総氏神として崇敬され続けてきました。



船形総氏神諏訪神社鳥居と崖の観音堂

堂の下祭自慢

堂の下区は、船形の中でも最も北にある地区で、船形地区総氏神である諏訪神社のお膝元である「宮本」として船形祭礼を盛り上げてきました。宵祭りの夜には、「こりと」と呼ぶ伝統行事の潮ごりを、青壮年全員で行います。木遣りに続いて砂浜から山の中腹にある神社まで百二十五段の階段を計三度も駆け上がり、祭の安全を祈願するとともに参加者の結束を高めます。

祭の運営は青年を中心に執り行われており、中でも堂の下山車の大きな特色の操舵にその団結力が現れます。山車を方向転換させるには二人一組になった若衆が車輪を綱で操作しますが、離子台下の狭い空間で視界も限られる中での操作は難度を極めます。二人の梶元と山車の外で指示を出す梶元長、山車後部のブレーキ係との三者の絶妙な連携があればこそ、山車の安全な運行が行われます。本祭りの夜も更けた頃、この祭礼一番のクライマックス、堂の下の急坂上「がり」が行われます。青年会長の木遣りを含図に一気に駆け上がる山車の姿は「勇壮」の一言です。

その後、小屋に入った山車を前に、昔ながらの漁師町特有の「大漁節」がお囃子とともに十番まで唄われ、堂の下の祭の幕が下ります。



大漁旗を振り回しながら曳き廻される堂の下の山車



移り変わってきた半纏



次代へ繋ぐ子どもたちと一緒に楽しむお祭り

船形諏訪神社の例大祭

祭礼日 七月第四土曜日・日曜日

船形地区の総氏神である諏訪神社の例大祭には、堂の下、浜三町、柳塚、大塚、根岸、川名の六地区から、山車、屋台、御舟が出祭します。昔は、宵祭、本祭、過ぎ祭の三日間執り行われていましたが、現在は宵祭と本祭の二日間だけになりました。

船形の祭の見せ場は、なんとと言っても「御浜出」です。仲宿の浜から砂浜に入り、山車・屋台の前車輪部に丸太で組んだやぐらを入れ、持ち上げては引張る、持ち上げては引張るの繰り返しで、堂の下の浜まで引きずり進みます。山車・屋台の屋根上では漁師町の心意気を示す大漁旗が威勢よく打ち振られ、朝方まで行われたこともしばしばだった



船形祭礼の勇壮な御浜出(昭和中期)

そうです。御神輿ならいざ知らず、山車、屋台までが浜に入るこのお祭りは県内でも類がなく、その光景は勇壮かつ豪快で、担ぎ手、引き手、観客が一体となった感動の連続でした。

しかし昭和五十二年、この浜に防波堤が作られたため、六地区が競った御浜出ができなくなり、昭和六十二年堂の下区が行った御浜出が最後となりました。

このパンフレットは、地域の方々からの聞き取りを中心とし、さまざまな文献史料からの情報を加えて編集しています。内容等につきましては指摘やご意見等ございましたら、ぜひご連絡いただき、ご教示賜りたくお願いいたします。